九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

東呉大学日本語文学系「二〇一四年度日本語教育国際シンポジウム」

大場, 健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1526102

出版情報：九大日文. 24, pp.84-86, 2014-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎イベント・レビュー

東呉大学日本語文学系「二〇一四年度日本語教育国際シンポジウム」

大場 健司（OBA Kenji）

二〇一四年五月三日、台湾・東呉大学で日本語学、日本文学関連のシンポジウムが開催された。東呉大学は台湾の大学の中でも日本語教育で有名な名門大学である。このシンポジウムに筆者も参加し、いくつかの研究発表を聴く機会があった。台湾では日本文学研究よりも日本語研究のほうが活発らしく、全体的に日本語学や日本語教育学に関する発表のほうが多かった。研究発表はA、B、Cの三会場で行われ、筆者は日本近現代文学が中心のC会場で発表を聴講した。いずれの発表も日本語で行われ、発表者には開催地である東呉大学の教員が多かった。

C会場の最初の研究発表は、淡江大学教授、曽秋桂氏の「エコ・クリティシズムから読む日本原発文学――3・11を境に見る未来像を描いた「隣の風車」と「不死の島」を中心に――」であった。この発表では、作家、アニメ脚本家の豊田有恒（一九三八―）の「隣の風車」（『小説現代』第一八巻五号、講談社、一九八〇年五月）と、多和田葉子（一九六〇―）の「不死の島」（谷川俊太郎、多和田葉子、重松清他『それでも三月は、また』講談社、二〇一二年二月）とがエコロジー思想や原子力発電との関連から論じられ、現在の台湾での反核デモを意識して反核的な結論が示された。

次の発表は、九州大学大学院の嚴基權氏による「「京城日報」における検閲の問題――佐藤春夫の「律儀者」を中心に――」であった。この発表では、一九〇六年から一九四五年まで朝鮮で刊行された日本語新聞「京城日報」に掲載された、佐藤春夫（一八九二―一九六四年）の「律儀者」（一九三八年一月七日―一一日／総三回）の検閲の問題が論じられた。「律儀者」が日本では検閲を受けたが、朝鮮では掲載されたことから、内地と外地での検閲情報の共有が緩いものであったことが論じられた。

次に、九州大学大学院の賴怡真氏が「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と「黄いろのトマト」の比較研究――サーカスをめぐる二つの言説」と題する発表を行った。宮沢賢治（一八九六―一九三三年）の「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」（生前未発表、一九二一、一九二二年）と「黄いろのトマト」（生前未発表、一九二四年）が対比され、同時代の言説が参照されながら、両テクストに共通して登場する「サーカス」の描写と可能性としての「人さらい」について論じられた。

台湾の学会ではパワーポイントを使って発表が行われることが多く、最初に挙げた曽氏の発表でもスクリーン上にパワーポイントが映されて説明がなされていた。賴氏の発表後には、司会の張桂娥氏（東呉大学）が、コメントを行うのに際して事前に

パワーポイントを準備しており、驚かされた。

また、このシンポジウムでは、予稿集としてそれぞれの発表を論文形式にまとめた冊子が配布されており、新鮮であった。二〇一三年七月末まで台湾大学日本語文学系の教授だった太田登によれば、台湾の学会では予稿集として『会議論文集』が学会の当日に配布され、発表者の業績として評価されるという（「五つの提言」（『日本近代文学』第八九集、日本近代文学会、二〇一三年一一月）一九六頁）。つまり、日本の学会ではレジュメは配布されても「口頭発表」の枠を出ないのに対して、台湾の学会では「口頭発表」の段階で「活字化」が行われているのである。

台湾の淡江大学では、二〇一四年六月には「第三回村上春樹国際学術研討会」が開催され、八月には村上春樹研究センターが設立されており、村上春樹（一九四九―）の研究が盛んである。同センターによって、二〇一五年七月には「第四回村上春樹国際学術研討会」が北九州市で開催される予定になっている。

日本で海外文学研究が行われているように、台湾でも日本文学研究が行われている。日本文学を読むのは、何も日本人とは限るまい。文学のエクリチュール（écriture）は国境を越えて読まれ、研究されているのだ。日本語が母国語でない研究者にとって、日本語は「他者の言語」（la langue de l'autre）（ジャック・デリダ「他者の言語」（『他者の言語――デリダの日本講演』法政大学出版局、一九八九年一二月）二五七頁）である。そのような研究者によってこそ、文学研究は「差異」を与えられるであろう。厳氏は「京城日報」に掲載された、日本文学の全集未収録テクストを論じることで、新しい視点を与えている。賴氏は宮沢賢治のテクストを森鴎外（一八六二―一九二二年）だけでなく、モーリス・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）や『グリム童話』（*Grimms Märchen*, 1812）といった西洋のテクストとの関連で読んでいる。「国家」や「共同体」の枠を越えてこそ、文学は差異を含んだ形で読まれるだろう。「国家」を越えるとき、日本文学研究は各国文学史的ナショナリズムを捨て、比較文学へと近づいていくことだろう。西成彦が言うように、ヨーロッパ文学との関係も視野に入れながら「外地の日本語文学」の研究が行われる必要がある（「日本語文学の越境的な読みに向けて」（『立命館言語文化研究』第二二巻四号、立命館大学国際言語文化研究所、二〇一一年三月）。ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）は自身の『グラマトロジーについて』（*De la grammatologie*, 1967）を引用しながら、テクストの両義性＝翻訳不可能性を前にしたとき、ネイティヴにとってさえもエクリチュールが「他者の言語」になると言っている（「他者の言語」二七九―二八〇頁）。自らの言語の「外部」に立つことこそが、文学研究に差異を与え、他者性の尊重や国家を超えることにつながるだろう。

最後に、シンポジウムの発表者名と題目をすべて記しておく。

【講演】

○楊凱榮（東京大学兼人民大学）「対照研究を通してみる日中両言語の違い」

○庵功雄（一橋大学）「日本語教育とコーパス」

○坪井秀人（国際日本文化研究センター）「総動員体制下における詩」
○康永富（韓国慶熙大学校）「ストーリー教材を活用した日本語文法教育」

【A会場】
○山本卓司（神戸大学大学院）「中国語の共起頻度から見る台湾人日本語学習者の接尾辞「的」の誤用」
○葉懿萱（東呉大学）「「トキ」をめぐる形式に関する一考察――時間表示機能の意味的相違を中心に――」
○朱廣興（東呉大学）「認知（習得）という文法の機能から文法化したとされたものを考える」
○劉洪岩（九州大学大学院）「日本語の後置詞に対する漢文介詞の影響」
○李霽芳（銘傳大学）「交渉という言語行動に関する意識の台日比較」
○盧月珠（東呉大学）「日本語と中国語の「心」と「気」を含む関連表現の文法構造分析と意味解釈――日中対照分析――」

【B会場】
○彭思遠（東呉大学）「台湾人学習者の外来語意識及びストラテジー――初級段階を中心に――」
○尾崎学（開南大学）「表現意図に応じた敬語表現の符号化の指導について」
○施列庭（開南大学）「自然言語処理技術を利用した日本語語彙学習支援システムの構築とその教育効果」
○陳美玲（東呉大学）「聴解における日本語学習者の自己評価及びその受け入れ方について」
○王淑琴（政治大学）、永井隆之（政治大学）「タンデム学習法を利用した授業の試み」
○李美麗（大葉大学）「四技応用日本語学科における教育目標とカリキュラムの結合度についての考察」

【C会場】
○曾秋桂（淡江大学）「エコ・クリティシズムから読む日本原発文学――3・11を境に見る未来像を描いた「隣の風車」と「不死の島」を中心に――」
○嚴基權（九州大学大学院）「「京城日報」における検閲の問題――佐藤春夫の「律儀者」を中心に――」
○賴怡真（九州大学大学院）「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と「黄いろのトマト」の比較研究――サーカスをめぐる二つの言説」
○落合由治（淡江大学）「説得心理学の視点から見た効果的説明の特徴――日本語雑誌のマルチジャンル的表現構成を中心に――」
○羅濟立（東呉大学）「日本語に影響された客家語語法研究――『標準広東語辞典』（1933）の事例研究――」

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年）